

実践報告

グローバル人材育成としての日本語教師養成 海外日本語教育実習の実践と成果

深澤のぞみ・冷 麗敏^{※1}

要 旨

金沢大学国際学類では、グローバル人材育成としての日本語教師養成を目指し、日本語教師養成プログラムを実施している。この日本語教師養成プログラムの仕上げの役割を担っているのが、中国北京師範大学で行われる海外日本語教育実習である。日本語教育実習生は、2週間にわたり、金沢大学の協定校である中国北京師範大学外国語言文学学院日本語系において、教育実習を行う。北京師範大学の教員に指導を受けながら、実際に中国人大学生に日本語を教えるという経験は、日本語教育の多様性を実感し、さらには海外で働くことの一端を知ることに繋がっている。

I はじめに

地球規模での人や物や情報の移動が簡単になる一方で、国家間の問題は多様化し、複雑化しつつある。このような時代に国際コミュニケーション力を持ち国際的な課題に対応できるグローバル人材育成は急務であると言われ、金沢大学人間社会学域国際学類日本・日本語教育コースでは、「異文化とのしなやかな共生」を目標に掲げる国際学類の中で、専門職としての日本語教師養成とともに、グローバル人材としての日本語教師養成を意識した教育が行われている。日本・日本語教育コースでは、グローバル化する現代社会における質の高い日本語教師の需要に適合したカリキュラムの提供を大きい目的としており、日本語教育の基礎的あるいは応用的な知識とともに、実践教育を重視している^{※2}。

この実践教育の中で、特に重視しているのが「日本語教育実習 A」、「日本語教育実習 B」^{※3}、そして、「海外日本語教育実習」である。

「海外日本語教育実習」は、中国の北京師範大学で実施されているが、単に日本語教育実習生を海外に送るというだけでなく、関係する教員や学生が緊密に連携する中で

行われていることが大きい特徴であり、金沢大学だけでなく、受け入れ先の北京師範大学の学生にとってもグローバル人材になるための学習機会となっていることが特徴として挙げられる。教育実習は、それまで学生が学んだ知識や教授技術を、実際の教育の場で運用してみる貴重な機会になるが、富谷（2007）にも述べられているように、海外教育実習は、限界のある自己の知識や経験の中で予測が不可能な事態にも対応して行動する能力が必要となり、国内での教育実習に比べてはるかに困難が多く、文化に埋め込まれた行動規範があらわになってしまうことも体験せざるを得ない。そのような困難に立ち向かい解決のためのストラテジーを身につけることが、海外での教育実習の大きい意義となる。

本稿では、これまで実施されてきた「海外日本語教育実習」の経緯や位置づけについて述べ、さらに教員や参加学生のそれぞれの視点からこの海外日本語教育実習を捉えなおし、その成果を多角的に浮かび上がらせることを目指す。

II 「海外日本語教育実習」の概況

「日本語教育実習」AとBの両方の科目を履修した学生のうち、希望する学生については、4年次の夏季休暇中に中国の北京師範大学外国語文学学院日本語系で、日本語教育実習を行っている。北京師範大学は金沢大学の協定大学であり、かつ大学院レベルでも二重学位プログラムを共に行っている大学で、従来から交流を継続している大学である。

この北京師範大学での海外日本語教育実習（以下、教育実習と略記）は、これまで2011（平成23）年度に初めて実施され、その後2012（平成24）年度、2013（平成25）年度にも引き続き実施された。詳細を表1に示す。

表1 海外日本語教育実習の実施状況

年度	期 間	参加人数	内 容
2011 (H23)	9月11日(日)~24日(土)	1人	総合日本語（1年生）、会話（2年生）など
2012 (H24)	9月9日(日)~23日(日)	2人	総合日本語（1年生、2年生）、 会話（2年生）など
2013 (H25)	9月11日(水)~25日(水)	1人	総合日本語（1年生）、 日本語口頭表現（2年生）など

教育実習期間は2週間である。金沢大学では夏季休暇中であるが、北京師範大学では新学年開始時期にあたる。2013年については、北京師範大学の学年暦の変更があり、

水曜日から開始することになった。基本的には、1週目は授業の見学、そして2週目から日本語教育実習生（以下、教育実習生と略記）が授業担当をするという内容になっている。途中の週末には、実習生の希望により、観光も行った。

本教育実習は、国際学類設置後に初めて開講された授業でもあり、2011年と2012年については、「異文化体験実習」の単位として認定されたが、2013年からは、専用の「海外日本語教育実習」の単位が付与されることになった。

教育実習の内容については、IVで詳細を述べる。

III 北京師範大学における日本語教育実習生受け入れ経緯と位置づけ

北京師範大学日本語学部において、2009年11月に日本語教育教学研究所が発足した。以来、中国の日本語教育、殊に日本語専攻課程における教室の授業をテーマに絞った国際シンポジウムの開催、中国国内の全国教師研修大会への講師出講、また全国教師教育大会（2013年夏）の企画と主催等、国内外に発信してきた。

日本語教育に関する研究活動に関しては、中国国内の日本語学習者のビリーフ調査や、中国人日本語学習者の日本語の発音に関する研究等、中国教育部^{註4}のプロジェクト研究を行っていることが挙げられる。

またそれに加えて、海外の日本語教育実習生の受け入れ、日本語教育実習のプログラムを実施している。これは海外への発信と海外の日本語教育支援と位置づけた活動である。教育実習生の受け入れは、2011年から開始しており、日本の金沢大学と埼玉大学と両大学の教育実習生を受け入れて来ている。前者は秋学期、後者は春学期に実施している。

金沢大学の教育実習生の受け入れのきっかけとなったのは、北京師範大学日本語学部と金沢大学人間社会環境研究科の二重学位プログラムの実施である。これが縁となり、筆者の1人である冷が東京学芸大学で客員教授として滞在中の2010年夏に金沢大学を訪問し、講演を行い、金沢大学生に対する日本語教育実習に関する説明会も実施した。この際に金沢大学の教育実習生の派遣・受け入れの詳細についての打ち合わせも行い、その翌年の秋、金沢大学からは教育実習第一期生が派遣され、日本語教育実習受け入れの第一歩に踏み出したというのが流れである。

IV 日本語教育実習の概要

1 教育実習の期間と教育実習生

金沢大学の日本語教育実習は毎年の秋学期（9月）の第2週目より開始し、2週間にわたって行われる。これまでの教育実習生は4人で、金沢大学の国際学類の学類生で、日本・日本語教育コースの授業を受講し、基礎知識に加えて、「日本語教授法」A、Bや、「日本語教育実習」A、Bなどをすべて履修した学生たちである。将来の進路は、必ずしも日本語教師を目指す学生だけとは限らないが、日本語教育に高い興味や関心を持っている学生ばかりである^{注5}。

2 教育実習の指導教員

教育実習の実施にあたっては、北京師範大学日本語学部の教員が教育実習プログラムの責任者となり、プログラム全体の期間や内容を検討し、金沢大学側の教員や教育実習生と連絡を取り合う。また、それに加えて、教育実習生が実習を行う予定の授業の担当教員が、教育実習生の指導教員ともなり、授業前の教案指導や授業後のフィードバックなどにあたっている。

3 チューター

北京師範大学では、大学院生をチューターに任じ、金沢大学から派遣される教育実習生を支援している。これまでの3年間でチューターを任じられた大学院生は、金沢大学大学院に二重学位プログラムで留学を控えた学生たちであり、ちょうど来日する直前の時期に、金沢大学の教育実習生のチューターとなることになった。チューターを務めた大学院生が来日した際には、すでに北京で親しくなっていた教育実習生が金沢大学での生活案内を行った。このことは、金沢大学の教育実習生を支援するとともに、北京師範大学の大学院生の金沢大への留学をスムーズに開始することにもつながり、本教育実習プログラムの特徴でもあり、かつ両校の連携が効果的に機能している例ともなっている。

4 日本語教育実習プログラムと担当授業

教育実習のプログラムは北京師範大学側が作成し、金沢大学と期間や内容などについて協議した上で、確定したものである。具体的には以下の内容から成っている。

1) 教育実習オリエンテーション

教育実習初日のオリエンテーションは、教育実習プログラムの説明や、2週間にわた

る北京師範大学での生活案内などを行う。特に、大学周辺の食事場所やスーパー、大学内の食堂などに関し、その日の午後チューターに案内してもらう。これは、教育実習生にいち早く周囲の環境に慣れ、翌日からすぐに教育実習の状態に入れるようになってほしいからである。

2) 教育実習担当授業の見学

第1週目は教育実習生が担当する予定の授業を見学する。しかし、見学のみならず、この間、教材や教案の準備、教育実習担当クラスの状況把握、また、指導担当教員の指導を受けるためにアポイントメントを取る方法(メールアドレスや携帯番号の交換)等、翌週の実習授業のために様々な事前準備をしておくという期間でもある。

3) 教育実習授業

担当授業は主に日本語専攻課程における基礎段階の科目で、「総合日本語」(1,2年生)、「日本語朗読」(1,2年生)、「日本語口頭表現」(2年生)、「日本語快速読解」(2年生)、「日本語文法」(2年生)などの科目がある。表2に実習のカリキュラムの一例を示した。

教育実習生が担当する科目については、毎回、事前に北京師範大学から教育実習の担当授業の候補を金沢大学に提案し、金沢大学側の教員と教育実習生が、それまでの経験などを勘案し、授業を選択している。これは、受け入れ校からの一方的な押しつけを避け、教育実習派遣校や教育実習生に主体となって実習授業に臨んでもらいたいという理念の現れでもある。

表2 教育実習カリキュラムの一例

第1週目(9月10日~9月14日)					
時間 ^{注6)}	月	火	水	木	金
8:00~9:40	オリエンテーション		総合日本語1年 <見学>		総合日本語1年 <実習>
10:00~11:40		日本語口頭表現 2年 <見学>			
午後	昼食後、指導教員との面談や授業準備など				

第2週目(9月17日~21日)					
8:00~9:40	総合日本語1年 <実習>		総合日本語1年 <実習>		総合日本語1年 <実習>
10:00~11:40	日本語音声1年 <実習>	日本語口頭表現 2年 <実習>			
午後	昼食後、指導教員との面談や授業準備など				

4) 教育実習指導体制

教育実習生の指導は、「打ち合わせ会」と「振り返り会」の2つと教案指導などのためのメール交換とで教育実習指導のシステムが構成されている。

「打ち合わせ会」というのは、実習予定の授業の準備会である。ここでは、教育実習生と指導教員が教材や授業の進め方などについて相談し、授業の準備をする。「振り返り会」は、教育実習生が行った実習授業についての反省会である。ここでは、実習生の授業について、指導教員がコメントをしたり、実習生自身が授業で気づいたことを語ったり、指導教員に質問をしたりして、皆でディスカッションをする。また「振り返り会」では、次の担当授業について、教育実習生が教案について指導教員に相談することもある。

このように、教育実習指導は授業準備のためにある「打ち合わせ会」に始まり、授業の振り返りのための「振り返り会」で終わるのではなく、さらに、引き続き次の授業準備のための「打ち合わせ会」へとつながっていくのである。

このような流れは、教育実習生に対する教案指導の重視の方針にも現れている。例えば、授業前に教育実習生が指導教員にメールにて教案を提出し、指導教員がこれについてコメントをして教育実習生にメールで送る。その後、教育実習生が指導教員のコメントに基づいて教案を修正する。「打ち合わせ会」で修正した教案について指導教員にもう一度チェックしてもらい、ようやく教案の確定版が完成され、実習授業を実施する。その後、「振り返り会」で実施した教案についてさらに話し合い、次回の授業改善案について指導を受けたり、話し合ったりする。このように、教育実習生の教案指導は一回に限るものではなく、教案の提出時から実習授業実施後まで、さらには次の授業へと、教案指導の全過程に指導教員が参加しているのが特徴である。これは、教育実習生が実習授業をし、指導を受けて次の実習授業に臨むのみではなく、実習授業事前の「打ち合わせ」から授業実施後の「振り返り」まで、教育実習生が主体になって、教育実習の全過程に参加し、実習の中で成長を遂げてほしいという理念が現れたものだと言える。

V 担当教員からみた日本語海外教育実習

IVで見たように、教育実習生は授業準備から授業の振り返り、次の授業の準備へのプロセスの中で、担当教員から手厚い指導を受けているが、北京師範大学から見れば、日本語教育のスキルが不十分で、しかも中国の教育や中国語などの知識のない日本人の教育実習生を受け入れて、授業をさせるというのは、考え方によっては、手間のか

かる活動であり、必ずしもそれに見合う効果が得られるかわからないというリスクも伴う。この点に関して、北京師範大学の担当教員に調査を行ったところ^{注7}、以下のようなコメントを得た。

コメント1

日本語教育専攻で学んだことを、中国で中国語環境の教育実践を通して運用し、検証するとともに、教育方法だけでなく、教育内容、教育対象（学習者）の面でも新しい発見ができればと思います。

コメント2

教育実習を通じて、「積んできた知識を如何に教えるかという実践力、予想外の事が起こった時に如何に処理するかという臨機応変の能力、教えられる人と如何に付き合うかというコミュニケーション能力、異国や新しい環境で如何に健康を維持しながら頑張っていくかという適応力」などが鍛えられると思います。

コメント3

教育実習は将来日本語教育を目指す実習生にとって、貴重な経験だと思います。大学で習った教育理論と言語知識を海外日本語教育の現場に生かし、授業をすることは実習生のこれからの勉強、あるいは就職にも役立つでしょう。そして、教育実習をきっかけに、中日青年の交流も深まりました。

コメント4

日本語教育実習は、中日双方の学生にとってはたいへん有意義なことだと思います。金沢大学の実習生にとっては、中国人日本語学習者を対象とした日本語教育実習の場が与えられ、そこで実践する金沢大の実習生が、外国人日本語学習者を対象とした日本語教育とは何かについて考えたり、外国人日本語学習者のニーズや、問題解決の方法について積極的な行動をとるようになったりし、日本語教育実習を契機に、今後、成長していくことでしょう。

また、金沢大学の日本語教育実習生たちが、授業準備の真剣さや精一杯の努力で授業に臨む姿が、同じ年齢にある中国人学生よりも成熟した一面を見せてくれました。それはおそらくこちらの学生たちには、プラスの影響を与えてくれたと思われます。

一方、金沢大の日本語教育実習生と北京師範大学の日本語学部の学生皆で一緒に、おしゃべりしたり、ご飯を食べたり、町に出かけたりする中で、双方の交流も深まりました。ある意味では、これも中日両国の若者の深い交流だと言えるでしょう。個人的な意見ではありますが、政治的な情勢がいかに変動しているのが、中日両国

間のこのような文化的交流，殊に若者の交流に支障をきたすことや中断してしまうことなどないと思われま

す。これらのコメントからは，教育実習の担当教員が，教育的効果，特に教育実習生に対する効果に着目していることが窺える。また，学生同士の交流の意義も意識されていることがわかる。

VI 教育実習生から見た日本語海外教育実習

教育実習に参加した教育実習生は，教育実習の後に，報告書をまとめて北京師範大学と金沢大学とに提出することになっている。本章は，これまでの学生からの報告^{注8}を引用しながら，教育実習生がこの教育実習を通して何を学び，どんな気づきがあったかについて，述べる。

まず，授業を実施していくにあたり，当然のことだが中国と日本とで違いがあるということを実感しているようである。日本国内での日本語教育は，日本語を日本語で指導するといういわゆる直接法の指導法が用いられることが多いが，中国では授業の基本部分は中国語で指導が行われる。そして，説明の後は，学習者の日本語での積極的な発話が求められたり，あるいは，正確な発音やイントネーションを繰り返し練習させられたりするという授業の流れになっていることが多い。

報告 1

これは日本と中国の授業に対する考え方の違いによるのかもしれませんが。日本ではやはり教師主体のため，先生の話す内容は静かに聞こうという考えを抱きますが，中国では学習者主体の授業のため，学習者も積極的に発話してくれるのだと考えました。(B)

報告 2

(「日本語音声」の授業について) その語彙の意味や文型には全く関係せず，ただ音声のみに着目したこの授業では，1つ1つの音をととても細かく訂正していた。(A)

報告 3

今回初めて，朗読の授業^{注9}を見学しました。正しい発音やイントネーション，間の取り方などを意識しながら練習している学習者の姿を見て，その難しさと重要さを感じました。(D)

報告1では、中国の授業を学習者主体の授業だと述べている。日本国内での日本語教育が教師主体だとは言い切れないと思うが、教室を学習者の発話の場であると明確に位置づけている様子がわかり、教育実習生もそのことに強い印象を持ったのだろうと思われる。日本国内の日本語教育では、日本語を使用する場が教室以外にも多くあるため、教室を日本語を運用する場であることへの意識が薄くなっている可能性がある。一方で、日本語を使用する文脈から離れた形で、日本語の発音だけを練習する、あるいは朗読を聞き、発音を練習するという授業に驚きもあったようである。これも、国内では日本語を聞く場面が教室以外に多くあり、自己モニターの機会もふんだんにあるが、それがあまりない海外での特徴的な教授項目と言えるかもしれない。

このように、日本における日本語教育が最もスタンダードなものだと捉える視点が、大きく転換する機会となっていることが窺える。

次に、グローバル人材育成という観点からは、日本語教育実習生の学びにはどのようなものがあつただろうか。

報告4

実習から学んだ、「相手の状況を把握すること、その状況に合わせた物を提供すること、相手の目線に立った考えをすること、小さなミスが信頼関係に繋がること、海外で働くにはその時の国際情勢が仕事にも関係すること」はあらゆる仕事の中で役立つと思います。(C)

報告5

今回は政治的にも難しい時期^{注10}到北京に行ったのですが、学習者も学内の方々も、日本人である私たちに対して普通に接してくれたのが大変嬉しかったです。

日本学習を通して、彼らが日本との友好関係を築く存在になってもらえたら嬉しいです。ただ批判的な目で見ただけでなく、実際に日本語・日本について知った上で、中立的な立場から考えられる人になってもらいたいです。(B)

報告4と5は、中国における対日感情が悪化した時期に教育実習をした体験を持つ学生の報告であるが、連日の報道などで知る状況と、実際のその場において現地の人々に関わった印象との違いや、その一方で多方面へのその影響の大きさなどについても強い印象を持ったと思われる。このような経験は、グローバル人材として世界で活躍するには、どんな内容の仕事であれ、重要なことであり、それを経験したことになる。大なり小なり、海外教育実習では予期できない事が生ずる可能性が高く、それをどう捉えどう克服するのかを考える貴重な機会となり得るのである。

最後に、共通して挙がっているのは、北京師範大学の学生の学習意欲の高さと積極性についてである。

報告例 6

北京師範大学の学生はとても学習意欲があり、ペアワークやリピートも積極的に行っていた。休み時間にはわからないことを自分から教員に質問をし、その意欲に助けられたことも多かったと思う。その学生の意欲を汲み、それをうまくいかし学習を促進させるのが教師の役目である。学習者をしっかり観察し、何を苦手として、それを克服するため目標に何が必要かを考えて授業を構成するということをとくに学んだ。(A)

報告例 7

中国の学生はとてもまじめで、熱心に勉強をする印象をもちました。彼らの姿を見ていると私も頑張ろうと思えました。(D)

海外での教育実習は、日本とは異なる環境の中、短い期間に北京師範大学の日本語学習者の状況や日本語授業の特徴を把握し、自らも実際に授業を行わなければならないというもので、実習生にとってはかなり負担の大きいものである。その実習生たちを最も応援し励ましてくれたのは北京師範大学の学生たちの積極さなのではないだろうか。それと同時に、実習生は、これまでに接してきた日本国内の日本語学習者たちと海外の日本語学習者とのモチベーションやニーズの違いにも気づく事ができたはずである。

以上、参加した実習生の報告には、日本国内での日本語教育実習とは異なる気づきや学びが多くあることが示されている。

VII 課題と今後の展望

2011年から開始した海外日本語教育実習は、参加人数はそれほど多くないものの、教育実習生にとっては貴重な経験となり、教授体験やスキルの向上などをもたらしている。さらに教育実習に関わった教員やチューターなどを含めた強いネットワーク構築にも効果があったと言える。しかし、いくつかの課題も浮かび上がっている。

まず、海外における教育実習の実施は、様々な外的な影響を受けやすい。2012年には、日本と中国の国家間の問題による関係悪化のため、教育実習を実施した9月に中国国内で大規模な反日デモが起こった。この時期に教育実習を実施することが可能な

のか、教育実習生の安全に問題はないのかなど、慎重な検討が必要となり、同時に、北京師範大学での受け入れ側でも大きい配慮が必要となった。結果的には、教育実習生が大学外での行動に注意したり、当初予定されていた観光なども安全な場所だけで行うなどで、何事もなく終了することができたが、今後も国家間の関係は大なり小なり緊張を伴う状態が続くであろう。そのような状況で、海外日本語教育実習の意義や目的は何なのか、またこのような緊張の原因が何なのか、常に問い続ける姿勢が求められよう。

受け入れ側からは、非日本語母語話者の日本語教育実習生の受け入れをどう考えるかの課題がある。日本に留学している日本語教師志望の外国人留学生が増えつつある中、教育実習をどのように扱うかは大きい問題である。しかし、中国人大学生にとって、日本人母語話者の生の日本語に直に触れる機会は、中国人大学生、とりわけゼロからスタートした1年生にとっては、大きい動機付けであり、たいへんいい刺激となっている。そのような状況下で、今後、非母語話者の日本語教育実習生の受け入れを考えるとすれば、その意義や目的を確認し、さらに日本語を学ぶ中国人日本語学習者にとっての利益は何かを慎重に検討し、いかに彼らの役割を最大限に引き出し、実習授業に貢献できるようにすればよいかを十分に考えることが必要であろう。これは、まだしばらく課題として検討していきたいと考えている。

以上、金沢大学と北京師範大学との連携で実施してきた海外日本語教育実習は、教育実習生にとっても、関係する教員やチューターの学生にとっても、極めて重要な経験をもたらしている。今後も、これらの経験を蓄積し、課題の検証を続けていくことで、さらなる効果を生み出すものとなるだろう。

【謝辞】

本論文において、北京師範大学において日本語教育実習生の指導にあたり、本稿にもコメントを寄せてくださった、北京師範大学教授翟奈娜先生、同準教授林涛先生、同張蓓先生、同張林先生に感謝申し上げます。

【注】

- 1 深澤のぞみ（金沢大学人間社会学域国際学類）、冷麗敏（北京師範大学 日本語教育教學研究所）
- 2 金沢大学における日本語教師養成は1996年に旧教育学部で開始され、その後、2008年度に大学改組が行われた後、国際学類で現在の形での実施が始まった。金沢大学人間社会学域国際学類におけるグローバル人材育成の理念と日本語教師養成の関係や、金沢大学における日本語教師養成の経緯については、深澤・加藤・志村（2013）に詳しく述べてある。

- 3 日本語教師養成のためのカリキュラムの中で提供されている「日本語教育実習 A」と「日本語教育実習 B」については、深澤・太田・峯 (2013) に詳しい。
- 4 中国教育部とは、中国において教育や言語などに関する事柄を扱う行政部門で、日本の文部科学省にあたる役所を指す。
- 5 これまでの4人の教育実習生は、2人は一般企業への就職をしたが、1人は国際学類卒業後大学院博士前期課程に進学し、修了後本格的に日本語教師として就職することになった。また、2013年度の教育実習生は、卒業後大学院に進学が決まっている。
- 6 北京師範大学での授業時間は、これまで1コマ100分で、前半と後半は各50分である。2013年より、1コマが90分となり、前半45分と後半45分となった。(途中10分の休憩や移動時間が含まれる。)
- 7 北京師範大学の教育実習の担当教員に、2013年12月にこの教育実習についてのコメントを求めたことに対して得た回答である。中国語でのコメントについては、筆者の一人が日本語に訳した上で、掲載した。
- 8 北京師範大学での教育実習後、北京師範大学と金沢大学に実習の報告書を提出することになっている。本稿では、4人の報告をそれぞれA、B、C、Dとし、引用した。
- 9 「朗読」の授業は、日本人教師によって実施されている。
- 10 2012年9月は、日本による尖閣諸島国有化への反発から、中国における反日デモが激化した時期であった。

【参考文献】

- 富谷玲子 (2007) 「海外日本語教育実習における実習生の学び：国内日本語教育実習との比較から」『日本語教育方法研究会誌』 14(1), pp.60-61
- 深澤のぞみ・加藤和夫・志村恵 (2013) 「グローバル人材育成としての日本語教師養成」『金沢大学留学生センター紀要』 第16号, pp.1-13
- 深澤のぞみ・太田亨・峯正志 (2013) 「グローバル人材育成としての日本語教師養成 その実践と成果」『金沢大学留学生センター紀要』 第16号, pp.63-79

The Training Course for Japanese Language Teachers as Global Human Resource Development -The Practice and Outcomes of Overseas Teaching Practicum-

Nozomi Fukasawa and Leng Li Min

The Japanese Studies Course, at the School of International Studies, includes a training program for Japanese language teachers as part of human resource development that aims to improve Japan's position in the global context. The overseas practicum teaching in Japanese is an important feature of this program. Students practice teaching for two weeks at the School of Foreign Languages and Literatures, Beijing Normal University, which has an exchange partnership with Kanazawa University. The student teachers teach Chinese learners the Japanese language with help from the professors of Beijing Normal University, and these student teachers are able to understand complexity of Japanese-language teaching. Through this, they get a sense of what it is like to work abroad.